

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版



小説 真慈真雄

挿絵 しののゆら



登場人物紹介

Characters



ふかもり ようこ
深森 葉子

知的で落ち着いた雰囲気を出し出す眼鏡っ娘。さくらの暴走をやりわりと止める良識者。



とうえん じ
桃園寺 さくら

メイド学校の風紀委員を務め、何かと理由をつけて啓介に突っかかってくる勝ち気な少女。



すみかわ いざよい
墨川 十六夜

啓介の実姉。御奉仕精神と優しい微笑み
で人の心を包み込む、ベテランメイド教師。

すみかわ けいすけ
墨川 啓介

十六夜に勧められ、メイド寮の管理人
をするようになった青年。

こがねい れもん
小金井 檸檬

若くしてメイド学校の教師となっ
た天才。生真面目さと年相応の少
女らしさを併せ持つ。

序章	
第一章	姉メイドのアナル実習
第二章	眼鏡メイドの淫乱奉仕
第三章	わがままメイドにおしおき調教
第四章	ロリっ子メイドのいたずらプレイ
第五章	メイドたちの乱交ハーレム
終章	
	241
	192
	139
	100
	059
	024
	007

「可愛い顔してても、やっぱり男の子ね……どう、気持ちいい？」

啓介は何か言おうとしたが、あまりの快楽に口をばくばくさせただけだった。すぐに抵抗する気力も失せ、欲望に流されるままに身体から力が抜けていく。

無言の寝室に、姉と弟の密やかな息づかいだけがこだまする。にちゆにちゆという卑猥な音が、その息づかいに混ざっていた。

「ふふ、若い子は元気ね」

十六夜は、亀頭の切れ込みを指の腹で撫でる。びくんつ、と震えるペニスを見て、満足げに微笑んだ。

「こんなになっちゃったから、お姉ちゃんが治してあげるね」

啓介がその言葉の意味を理解するよりも早く、濡れた柔らかいモノが亀頭の裏側を撫でる。指とは違うざらついた感触に、思わず青年の腰が跳ねた。

「なっ!? えっ、くううっ！」

身体を起こした啓介の視界に飛び込んできたのは、弟のペニスを舐める姉の痴態だった。メイド姿の美女が、ちろちろと舌を動かして怒張を舐めくすぐっている。

十六夜は男根を指でしごきながら、ペニスの付け根から先端へと舌を這わせていた。ねつとりと濡れた熱い感触。

れるお……ねろんっ……ちろちろちろ……。幹の裏側を舌全体で舐め上げ、尿道口を舌

端でつつく。唾液で濡れた舌は逸物がとろけそうなほどに心地よく、男の性感帯を隅々まで刺激していった。

「うっ、ああうっ！ ぐっ！ うああっ！」

刺激に脆い若者のペニスは、過剰なほどに快楽を受け止める。思わず姉の頭に手が伸びるが、脱力しきった指先はメイドキャップを虚しくつかむだけだ。

——ちゅっ。十六夜の唇が、弟の亀頭に接吻をする。とろけそうなほどに柔らかい感触に、啓介の思考が停止した。グロテスクな亀頭に優しい口づけをする姉の姿が、一瞬天使のように見えてしまう。

そのまま唇は滑らかに肉棒を受け入れ、啓介の男根は姉の口腔に包まれていった。生暖かく湿った口腔粘膜が、勃起全体を包み込んでしまう。

十六夜の口の中は、充血した怒張よりも熱い。たっぷりと含まれた唾液が、にゆるにゆるとペニスに染み込んでくるようだ。

「ん……ふう……んっ……」

艶めかしく息を漏らしながら、姉メイドはペニスを頬張る。肉の幹に唾液を塗りつける。喉の奥まで逸物を導いた。口腔粘膜がきゅっと締まり、亀頭に甘い衝撃が走る。腰椎までとろけてしまいそうな感触に、啓介は夢見心地にさせられてしまった。

だが青年は、必死になって姉を制止しようとする。

「ね、姉ちゃんきたなっ……おっ、おおうっ……！」

男性器を口に含まれることに、むしろ啓介の方が抵抗を感じていた。しかしあまりの快楽のせいで、声に覇気がない。

（なんだこれっ、熱くてくすぐったくて……も、もう出そうだ……！）

タキシード姿の青年は悶えながら、姉の口淫奉仕に酔いしれる。

口腔粘膜と舌が、ペニス全体に吸いついてくる。それだけでも、射精してしまいそうなほどに気持ちいい。おまけに喉の奥に亀頭が当たると、そこがキュッと締めつけてくる。熱くぬめった締めつけに、ペニスがびくびくと痙攣した。

身体の奥底から湧き上がる衝動にせつつかれ、青年は情けない声をあげた。

「ね、姉ちゃんダメだ……出ちゃうよ……」

啓介が息も絶え絶えに言うのと、十六夜は弟の男根をしゃぶりながら目を細めた。ゆっくりと頭を引いて、昏でしごきながらペニスを解放する。

「なあに、だらしないわね。もっと気持ちよくしてあげるから、もう少し頑張ってくださいなさい」

そう言うのと姉メイドは、胸元のボタンをゆっくり外し始めた。手際よくボタンを全部外してしまおうと、大人っぽいデザインのブラジャーが襟元から露出する。

十六夜はブラジャーのフロントホックを外すと、その豊かな乳房をさらけ出した。

ぶるんっ！ ずっしりと重そうな巨乳が、全ての縛めから解き放たれて溢れ出す。陽に灼かれることのないバストは、白く柔らかく、弾力があつた。

(で、でかい……！)

啓介は目を丸くして、姉の巨乳に釘付けになる。最後に十六夜の乳房を見たのは、彼女が中学校に上がる前だ。その頃から巨乳だと友人たちから評判だったが、今の十六夜の乳房はその頃よりも遙かに大きい。

メイド服の胸元から飛び出した乳房を、姉メイドが両手で抱えている。スイカみたいな大ききのバストだったが、張りがあつて形が崩れない。十六夜の腕の中で、見事な曲線美を誇る双球が、たふたふと波打っていた。

「オナニー以外で射精するのは初めてでしょう？ なら、お姉ちゃんもっと素敵な方法で射精させてあげるわよ」

「え、姉ちゃん何を……わわっ!？」

問いただすよりも早く、黒衣のメイドは自分の巨乳を弟の勃起に押し当ててきた。白い双丘が柔らかくペニスを包み込み、そのまま埋没させてしまう。白い果実はひんやりと冷たく、灼けつく肉棒に心地よい安らぎを与えてくれるようだ。

「ローションで濡らして……と」

エプロンからチューブ入りのローションを取り出すと、十六夜はそれをたっぷりと胸の

谷間に垂らした。透明な粘液が姉の乳房を濡らし、その奥に埋もれた啓介の男根にまで染み込んでくる。

（な、なんだ？ 何が始まるんだ？）

緊張と不安のせいで、目の前の光景から視線を外せない啓介。だが、脈打つペニスは期待と興奮に震えている。

そんな肉棒の疼きを感じ取ったのか、血の繋がったメイド美女は艶やかに微笑んだ。

「出したくなったら、好きなどころに出していいからね」

十六夜はそう言うのと、左右から乳房を圧迫し、挟み込まれたペニスに刺激を与えた。そのままゆつくりと、ローションまみれの双丘を上下させる。

ぬらっ……ぬちよっ、にちゅううっ……！ 滑らかで柔らかい乳房が、ぬめりながら勃起を撫で始めた。張り艶のある乙女の柔肌が、いきり立つ怒張に優しく絡みつく。

甘く切ない心地よさに、タキシード青年は情けない悲鳴を漏らした。

「はっ、ああうっ……！！ くふうっ、うああっ！」

「ふふ、啓介ったら女の子みたいな悲鳴をあげるのね。可愛い」

くすくすと笑いながら、姉メイドがパイズリ奉仕を加速させる。弟の反応を愉しむように、少しずつ上下動を速めていった。

にちっ、ぬちゅっ、ちゅく、にゆるっ！ ときに強く激しく、ときに小刻みに、巧みに

変化をつけた動きが男根を責める。つるりとした柔らかいバストは変幻自在に形を変え、ごつごつしたペニスを隙間なく包み込んでいた。

それと同時に、つんと尖った乳首が、青年の内股に押しつけられる。十六夜も興奮しているのだ。尖った乳首はパイプリのたびに激しく動いて、敏感な内股をくすぐるように撫でていた。

「あは、私も気持ちいいわ。あんっ……ちよつと癖になりそう……」

「欲望に濡れた瞳で、巨乳メイドは青年を見上げる。

（く、口でされるのとは違って……これも気持ちいいっ！）

生真面目だったはずの姉の淫技に、啓介は心を奪われていた。まだ微かに「姉弟なのに……」という背徳感が残っていたが、それよりも遙かに大きな快感が罪悪感を洗い流してしまう。

だがまだ、これは快楽の序曲にすぎなかった。十六夜は舌を伸ばすと、胸の谷間から顔を覗かせている亀頭の先端を舐める。ローションと乳肉で揉まれて真っ赤に充血していた亀頭に、電撃のような快感がほとばしった。一瞬遅れて切れ込みから、じわりと先走りの滴がにじみ出す。

「ううっ!？」

青年は下腹部に力を込めて、必死に射精をこらえようとした。ペニス全体を包み込む乳

房と、勃起の先端を刺激する舌。

啓介の男性器は柔らかく甘い感觸のバストで溶かされ、巧みに急所を責めてくる舌端に弄ばれる。ぞくぞくと背筋を快感が昇りつめてきて、タキシード青年は射精の衝動に身を震わせた。

だが、そんな弟の抵抗を姉は許さなかった。

ぐちゅっ、ずちゅぬっ、ちゅく、ちゅぶぶっ……！　パイズリの動きが一層激しさを増して、ローションが細かく泡立つ。それと同時に舌端が亀頭の鈴口に差し込まれ、唇がカリをしごき上げた。

「んっ……我慢は毒よ、啓介。お姉ちゃんの口で射精していいから、ね？」

「そ、そんなことでき……ひああっ！」

拒絶の言葉を口にした青年だったが、尿道口を舌でほじられて悲鳴をあげる。甘い火花が視界で明滅し、腰がびくびくと跳ねてしまう。

すでに熱くたぎった欲望は、尿道いっぱい詰り込まれていた。破裂しそうなほどに反り返った怒張が、姉の懐に抱かれて射精直前のひくつきを繰り返している。

（やばい、やばいって……このままじゃ射精しちゃうよ……）

実の姉にパイズリとフェラチオで奉仕されているというだけでも背徳的なのに、この上、姉の口に射精してしまうなど、啓介にはできなかった。根っから奥手な青年は、なんとか



して射精を食い止めようと歯を食いしぼる。

だがそんな抵抗を愉しむかのように、十六夜の乳房と唇はペニスを弄ぶ。特に龟头周辺を舌と唇、それに乳房を使って丹念に舐め、吸い上げ、揉みほぐす。

「んっ……んむうっ……!! んっ、んんっ……!! んふっ、ふうんっ……んううっ!!」
ちゅううううっ! ひときわ激しく逸物を吸われた瞬間、啓介の頭の中が真っ白になった。尿道が真空状態になるほどのバキュームフェラに、溜め込んだ精液が暴発を起こす。

「ふっ、くうっ、うあああゝゝゝ——っ!!」

びゅくんっ!! びゆるっ!! びゅっ、びゅううううっ!! びゅくびゅくんっ!!

ペニスの先端を姉の唇についばまれたまま、青年は猛烈な勢いで射精した。陰囊が痛くなるほどに、精液の奔流が輸精管から尿道へ、そして尿道口へと溢れ出す。

「んっ……!! んんっ、んふう……!!」

十六夜は少し眉を寄せたが、弟の男根から口を離さなかった。きゅつと唇をすぼめ、放たれるザーメンを口腔に受け止める。

びゅぶっ、びゅくびゅくんっ!! どびゅうっ! びゆるるるるっ!!

(お、俺……いま、姉ちゃんの口に射精してる……!!)

呆れるほど多量の子種汁を姉の口腔に注ぎ込みながら、啓介はぼんやりと背徳の愉悅に浸っていた。こんな快楽は、自慰では決して得られなかった。頭の芯が灼けつくようだ。

どくっ、どくんっ……どくどくっ……どくんっ！

我慢に我慢を続けていたせいも、射精の勢いはなかなか止まらない。輸精管が破裂しそうなほどの勢いで、十六夜の喉や舌に白濁液が叩きつけられる。

青年は腰を震わせながら、精液を最後の一滴まで姉の口内に撒き散らした。

「うっ、あああ……ぐっ、うおっ……！」

長い射精がようやく終わり、啓介はぐったりと全身の力を抜いた。心地よい疲労感が身体を包み、それと同時に、溜め息が漏れそうなほどの満足感が湧き起こってくる。

青年が股間に視線を向けると、メイド姿の姉はペニスを丹念にしゃぶっている最中だった。唇の端から白濁の滴が垂れており、それがドキッとするほど淫靡で艶めかしい。

ローションまみれの乳房は摩擦でほんのりと桜色になっていて、不思議なほどに美しく、唾液や先走り汁があちこちに飛び散ってはいるが、ぬらつく双丘は張り弾力があって触り心地がよさそうだ。勃起した乳首が啓介の下腹や太ももを撫で、くすぐったい心地よさが走る。

「ん……んふう……うん……」

ちゅぽちゅぽと音を立てながら、射精直後の逸物を舐め清める十六夜。真っ赤に充血した弟の肉茎から唇を離すと、唾液の糸がツウツと垂れた。

ヴィクトリア朝のメイド服を着た美女は、口中のスペルマを味わいながら、喉を鳴らし

て飲み込んでいく。

「んっ……ぷはあっ……」

大きく溜め息をつくのと、十六夜はエプロンのポケットからハンカチを取り出して、口元を拭いた。白く清潔なハンカチに、ザーメンと唾液のシミが残る。

ハンカチをしまい込むと、姉メイドは身体を起こして弟を見下ろした。

「どう？ 女の子ってステキでしょう？」

「え……あ、うん、そうかも……」

何となく歯切れの悪い返事をしながら、視線をそらす啓介。

(姉ちゃんのこと、女性として意識したことがなかったからなあ……)

そんなことを考えて、純朴な青年は少し気まずい気分になる。いけないことをしてしまったようで、どうも罪悪感が拭えない。

だが、そんな弟の態度が不満なのか、十六夜は首を傾げる。

「なあに？ ひよっとして、まだ物足りない？」

「え、いや、そういう訳じゃ……って姉ちゃん何してるっ!？」

啓介が慌てた声をあげたときには、黒衣のメイドはロングスカートをめくり上げていた。モデル顔負けの美しいふくらはぎが露わになり、続いて白く豊満な太ももが視界に飛び込んできく。働く女性らしく、無駄肉是一片もない。だが同時に、女性らしい優しげな曲線

美も兼ね備えていた。

股間を覆うのは黒いレース地のパンティ。落ち着いたメイド服とは裏腹に、扇情的で大人の雰囲気漂わせている。

「何って……あなたの女性恐怖症を治してあげるのよ。セックスしてみれば、女の子がいものだってわかるでしょ？」

「ばっ、馬鹿なこと言うなよ！俺と姉ちゃんは実の姉弟なんだぞ！セックスしていいわけではないだろっ！」

正論を言う啓介を、姉は珍獣でも見るような顔で見つめる。それからあっさりと、こう言った。

「しちゃいけないから、興奮するんでしょ？」

「なっ……!?」

絶句した啓介を見て、十六夜はおかしそうに笑みを浮かべる。それから弟の股間に手を伸ばして、まだ硬いままの勃起を撫でた。

さわっ……。触れられた瞬間、青年の男性器にさざ波のような快感が生じる。尿道が破裂するかと思うほど射精したにもかかわらず、肉欲の火は消えていかなかった。

まだ物足りなさそうなペニスには、その軽いタッチだけでビクビクと脈打つ。舐め清められたばかりの先端に、じわりと透明な滴がにじみ出していた。

彼女の言葉どおり、青年の勃起は硬く怒張っていた。ちびっこメイドの小さな足先で刺
激された男根は、ひくひくと切なげに脈打っている。

「あなたがこの男を御主人様にする気なら、御主人様の欲求不満をそのままにはしないわ
よね？」

「え、それは……」

ポニーテール少女は一瞬口ごもるが、すぐになけなしの意地を発揮して叫ぶ。

「とっ、当然です！ メイドたる者は、御主人様のどんなお望みにも応えなくてはなりま
せん！ 九敬家政婦学院の校訓ですから！」

「じゃあ私の代わりに、この男のオチンチンを足で気持ちよくさせてちょうだい。……ま
さか、今さらできませんなんて言わないわよね？」

「ええっ、くう……ううう……もっ、もちろんですとも！」

実の姉をここまで挑発する蜜柑も蜜柑だが、その挑発にどこまでも乗っていく檸檬も相
当なものだ。鼻息も荒く、ちっちゃな身体がベッドに飛び乗ってくる。羽毛のように軽い
肢体は、ベッドのスプリングをほとんど軋ませることはなかった。

ちびっこメイド先生は、靴を脱いだ。ついになぜか、ソックスも勢いよく脱いでしま
う。抜けるように白い素足を、青年の前に晒した。

発達途上の少女の脚は、信じられないほどに細く華奢だ。水彩画でスッと描いたような、

淡く繊細な曲線美が眩しい。

両手で顔を覆いながら、檸檬は足元で屹立するペニスを見下ろした。おそるおそる、と
いった感じで、爪先を勃起に近づけていく。震える足先が可愛らしいが、その足先が狙っ
ているのは怒張した男根だ。

——ちよんっ。

「ひゃっ!？」

微かに触れるか触れないかのところで、少女の爪先が引っ込められる。啓介が見上げる
と、ポニーテールメイドは耳まで真っ赤になっていた。頬に両手を当てて、可哀想なぐら
いにうろたえている。

「ほら、それじゃいつまで経っても射精しないわよ」

蜜柑がボソリと呟き、ソックスに包まれた足で肉茎を無造作に踏んだ。絶妙な力加減で、
尿道に心地よい重みが増えられる。すぐに往復運動が始まり、とろけるほどに柔らかい足
裏がペニスをしごき始めた。足の親指と人差し指が幹を挟み込み、器用に亀頭のくびれを
締めつける。

「檸檬、こうやって擦るの。根元からさきっぽへしごいて……雁首のところは念入りにし
て、ね。こんなふうに、足指の間で挟んであげるといいわよ」

実演してみせた後で、ツインテールメイドは足を少しずらした。どうやら根元の方をし

ごくつもりらしい。

一方の檸檬は少しの間、赤黒く充血した亀頭を食い入るように見つめていた。それからごくりと生唾を飲み込んで、再び足をペニスに近づけていく。

「い、いきますよ……御主人様……」

ふにっ。今度は触れても、ちびっこメイド先生は足を引つ込めなかった。蜜柑のソックスと違い、素足の感触が生々しい。さっきまで靴を履いていたせいか、少し蒸れた感触が妙に卑猥だ。

「え、えと……こう……ですか？」

ぎこちなく足を動かして、おそろのおそろの亀頭を撫でる檸檬。もどかしいほどに繊細なタッチだが、焦らされるような快感があつて悪くない。

トワタリと陰囊を揉みほぐしていた蜜柑が、足コキ初心者姉に奉仕の仕方を教える。「もっと強く踏んでも大丈夫よ。気をつけなくちゃいけないのは、玉の方だから……もっとも、これだけマゾならどう扱っても大丈夫よね」

快楽に惚けている啓介を見下ろして、ゴスロリ電波メイドが目を細めた。二人のちびっこにペニスを踏まれて勃起している身としては、何も言い返せない。

しゅり……しゅり……むにゅ、むにいつ……。ソックスと生足が男根を這い回り、異なる肌触りで肉棒を擦る。

「痛く……ないですか？」

「ああ、大丈夫……うっ……ていうか……とても気持ちいい……」

啓介のその言葉に、檸檬は露骨に安堵した表情を見せた。先ほどよりもややりラックスした様子で、足コキ奉仕に集中していく。しかしやはり恥ずかしいのか、頬が紅潮している。

ソックスに包まれた蜜柑の足先が、玉袋を熱く揉みしだく。ずくずくと脈打ってきた精巣から、ペニスの根元へ熱い疼きが集まってきた。それを足裏でしごき、先端へと送り出すゴスロリ少女。外見からは想像もつかない、巧みな足コキ奉仕だ。

もちろん、サディスティックなツインテールメイドは、男への言葉責めも忘れてはいない。

「こんなちびっこ二人にオチンチン踏まれるのが、そんなに気持ちいいの？ 変態ね、汚らわしいわ。……だから、もつと虐めてあげる」

一方、檸檬もたどたどしい動きで、生足コキを続けていた。透き通るように白い足が、凶悪な容貌の亀頭を優しく撫でる。灼けつくペニスを癒やすように、あどけない金髪メイドの愛撫が淡い快楽を広げていく。

「えと、あの……いい、痛くないですか……？ 初めてだから巧くできませんけど、一生懸命やりますから……」

妹とは対照的に、献身的に奉仕する檸檬。

「あ、罵ったりした方が気持ちいいんですね。えーと……こ、この変態マゾ御主人様めっ！ もつとぐりぐり踏んでやるから、覚悟してくださいっ！」

（いやそれは、今の俺にとっては御褒美だ……しかしまずいなあ、虐められるのがこんなに気持ちいいなんて……）

次第に火照ってくる頭で、啓介はそんなことを考えていた。さくら相手にSMプレイをしているときは責める側だったが、こうやって責められる側になるのも悪くない。何もかもをメイド少女たちに委ねて、彼女たちが与えてくれる倒錯した快楽に酔っていればいいのだ。青年は不思議な安らぎと興奮を感じていた。

「ふん、腰まで振って汗だくじゃない。本当にバカで素敵なマゾ奴隷ね。可愛いわよ」

「えっ、えいえいっ！ このっ、どうだどうだっ！」

愉悅に浸りながら嘲笑を浴びせてくる蜜柑と、懸命になって責めてくる檸檬。二人がかりの足コキプレイに、啓介の怒張は限界寸前だった。

（うああ……踏まれてる……罵られながら、こんなちびっこたちにチンチン踏まれて感じてる……）

さらに双子たちは、呼吸を合わせてリズムカルに刺激を与えてきた。檸檬が踏むと蜜柑が圧迫を緩め、檸檬が緩めると蜜柑が踏む。

ふにつ、きゅつ、ふにつ、きゅつ、ふにつ、きゅつ……。

まるで見えない一人の少女が、啓介の上で足踏みをしているようだ。双子姉妹のコンビネーションは抜群で、ひと踏みごとに身体が熱くなってくる。

「くっ……うあぁっ……お、おおうっ……！」

被虐の悦楽でペニスがいきり立ち、亀頭の切れ込みからは透明な滴が溢れ出す。ポニーテールメイドの素足にカウパー液が塗りたくられ、にちゃにちゃと卑猥な音を立てていた。喘ぐ青年を見下ろして、蜜柑が唇の端を歪ませる。

「もう限界なのね。いいわ、ザーメン出させてあげる。踏まれてイッチャいなさい」

「ごしごしごしっ！ ソックスの足裏が、勃起の根元を激しく擦り上げた。」

「ぐうううっ！」

一瞬、啓介の視界が激しく明滅し、強い酒でも飲んだように身体が熱くなる。尿道に詰まった白濁が、絞り出されるようにして先端へ集まってきた。

「け、啓介さんっ！ じゃなくて御主人様っ！ もっと激しくしますからっ！」

檸檬が叫びながら、一気に足コキを加速させる。足の指でペニスを挟んで、火がつきそうな勢いで擦り立てていた。溢れる先走りの汁が潤滑液となり、ヌルヌルとした締めつけが亀頭を痺れさせる。

「ふっ！ くううっ！ おおっ、うあぁっ！」

食いしばった歯から呻きが漏れ、青年は手首を縛られたまま身悶えした。腰が勝手に跳ねてしまいが、それはちびっこメイド二人の足で押さえつけられる。その圧迫感と被虐感が、ますます快楽を加速させていく。

「ふふっ……無様ね。ほら、もつと喘いでごらんさい」

「もうっ、御主人様あつ！ こっ、これでも気持ちよくないんですかつ！ えいえいっ！」
繊細で巧みな愛撫と、激しく情熱的な奉仕。金髪ゴスロリメイドの足が、絶頂寸前の勃起を激しく踏み、揉みしだく。あどけない少女たちの足コキプレイで、怒張は破裂しそうなほどに脈打っていた。

「むにゅううっ！ とどめとばかりに、檸檬の足指が幹をしごき上げる。痛いほどに強く締めた足指から、快楽の火花が散った。同時に蜜柑が円を描くように陰囊を踏みつけ、甘やかに精巢を圧迫する。」

「やっ、やば出……ぐっ、うおおお——っ!？」

びゅうううう——っ!! びゅっ、びゅびゅっ!! びゆるんっ!! びゅばっ!!

絶頂をこらえる暇もなく、弾けるように射精が訪れた。踏みつけられていたペニスが大きく跳ねて、信じられない量の精液を放出する。

飛び散る白濁の飛沫が、双子メイドの脚やスカートにぶちまけられた。白い軌跡を描いたスperlマは、少女たちのふくらはぎや足首、それに足の甲に絡みつく。粘りけの強いザ

ーメンは、飛び散ったときの形のまま、小さな乙女たちの肌べつとりとこびりついてた。

「あ……ちよつと、何するのよ」

「きゃっ!? な、なんですか、これ……!?」

同じ顔で違う反応を見せる姉妹だったが、一人とも男根から足を離すことはなかった。射精中のペニスを揉みほぐすように踏み、あるいは足指で緩やかにしごき続ける。

びゅうっ、びゆくっ、びゆるんっ!! どくどくっ!! びゅううっ、びゆるびゆるっ!!

頭の中までエクスタシーで満たされ、視界がフェードアウトする。

ザーメンシャワーは少女たちの足指に絡みつき、足の甲を汚し、足裏に粘りつく。ソックスの布地がスペルマを吸い取り、生足の素肌が精液の臭いに染まっていた。

スカートの襞に貼りついた白濁ゼリーは、ゆっくりとメイド服に染み込みながら垂れていく。太い粘液の筋が大粒の滴になり、ぼたぼたと床やメイドたちの足に垂れた。

(足で射精しちまった……けど、これすごくイイ……!)

病みつきになりそうな快楽に、青年の脳髓が浸されていく。オルガスムスに霞む啓介の視界では、金髪のちびっこメイドが二人、青年を見下ろしていた。

「はあっ、はあっ、はあっ……!」

全てを放出し終えた啓介が、ぐったりとベッドのシートに身を沈める。エクスタシーの

余波が過ぎ去ると、姉妹の会話が耳に飛び込んできた。

「すごいわね。これだけ精液出しても、まだこんなに元氣だし……」

微かに頬を緩ませながら、蜜柑がペニスの根元をしごく。

「こ、これが……男の人の、精液……？」

顔を真っ赤に染めて、檸檬はスカートに染みついたザーメンを見つめていた。白濁した粘液が、糸のようにスカートの襞にこびりついている。黒い生地に、精液の白がよく映えていた。

金髪のメイド教官は、おそろのおそろ指でつまみ上げる。そして、ゼリー状のスペルマを凝視した。どろりと垂れた白濁の糸が、少女の指にぬるぬると絡みついている。

「どう檸檬、興奮してきた？」

足コキを緩やかに続けながら、ツイントールのゴスロリメイドが姉の肩を抱いた。檸檬の耳朶を甘く噛みながら、からかうように耳元で囁く。

「そっ……それは……」

生真面目なポニーテールメイドは、頬を染めたままうつむいてしまう。しばらくもじもじしていたが、やがて檸檬は微かにうなずいてみせた。

「いい子ね」

蜜柑は姉の頬を撫でると、檸檬の指にまとわりつくザーメンを舌ですくい取った。その



まま姉に唇を重ね、白濁を流し込む。

「んっ……ぷはあっ！ なっ、何をするんですか蜜柑ちゃん!?」

「あら、これは舐めても飲んでも大丈夫よ。だから……」

蜜柑はそう言いながら、ポニーテールメイドの肩を押さえて、膝をつかせた。それから足を持ち上げ、姉の眼前に爪先を突き出す。電波少女のソックスは、煮詰めたような濃い精液で汚れていた。

ぬちよお……。ザーメンまみれの爪先で檸檬の頬を撫でつつ、蜜柑は倒錯的な微笑みを浮かべた。

「あなたの御主人様の子種よ。……綺麗にしてくれる？」

「……うん」

こっくりとうなずくと、檸檬は舌を伸ばす。ためらいながらではあるが、彼女は舌を伸ばした。妹のソックスに舌を這わせ、べっとりとかびりついた子種汁を舐め清める。

むわっとした性臭を放つスペルマが、少女の舌端ですくい取られ、飲み込まれていく。唇の端から白濁が垂れているのが、何とも淫靡だ。

「んふっ……んむ、あむう……んっ、んんう、んくっ……はあっ、はあ、はあっ……！」

荒い息を吐きながら、妹の足を舐めるポニーテールメイド。興奮を隠しきれない様子で、ほんのりと上気した太ももや頬が色っぽい。

蜜柑が姉の頬を爪先で撫でるせいで、檸檬の顔は精液まみれになってしまう。ぬらぬらした白濁液が、恐いくらいに整った少女の顔を卑猥に彩っていた。

(あの真面目そうな檸檬ちゃんが……俺の精液を舐めてる……)

啓介が驚きながら見つめていると、蜜柑が姉の頭を撫でながら次の指示を下した。

「ふふ、檸檬もだいぶ素直になってきたわね。……今度は、あなたの御主人様のオチンチンを舐めて綺麗にしてあげなさい」

ツインテールの金髪少女に命じられるまま、ポニーテールの純情メイドは青年の股間に顔を近づけた。不安そうな表情を浮かべた金髪ハーフの少女が、濡れた唇を勃起に接近させていく。

「れ、檸檬ちゃ……おおうっ!」

無理に舐めることはないと言おうとした矢先に、熱い感触が龟头粘膜を襲った。射精直後の敏感なペニスを、ねっとりとした口腔が包み込む。

ぬちゅう……ちゅぽっ、れろっ……。熱く潤った口の中で、小さな舌端が別の生き物のように蠢いていた。男根にこびりついた白濁液を、舌が舐め取っては飲み下していく。

一途な金髪メイド教官は、上目遣いに御主人様を見つめる。

「ほふひんはは、ひはくはひれふは？」

「……何言ってるのかわかんないけど、とりあえずすぐく気持ちいい」

「ね、姉ちゃん……」

絶句した弟を困ったように微笑むと、姉メイドは青年の唇にそつとキスした。甘く切ない、名残の口づけ。禁忌を犯した者同士だけが味わえる、たまらなく甘美な背徳の味がした。

たつぷりと余韻を味わってから、十六夜は腰を上げた。弟の逸物に未練があるのか、ゆつくりとペニスを引き抜いていく。

「んっ……くうっ……」

ごぶり……ぼたぼたっ。淫水まみれの肉棒が引き抜かれた瞬間、膣口から白濁の塊が溢れ出した。ぷるぷると弾力に富んだザーメンは、長い糸を引きながら垂れ落ちていく。

「あんっ、もつたいない……。まあ、妊娠しちゃってたら、そのときはそのときね。明るい家庭を作りましょ」

とんでもないことを吹きながら、黒衣のメイドがにつこり微笑む。すると、脇からさくらが声をかけた。

「ね、ねえ先生、次は私の番でいいですか？ 啓介の指、全然物足りなくてダメなんです」
「あらあら欲張りさんね。いいわよ、どうぞ」

教え子の頭を撫でながら、十六夜がその場を譲る。

「よーし、がんがんやるわよ……って、なによ啓介」

青年のぐったりした表情を見たお嬢様メイドは、腰に手を当てて不満そうに唇を尖らせる。

「私とセックスできるんだから、もっと嬉しそうな顔しなさいよ」

「む……無理言うな。少し休ま……うわっ!？」

息も絶え絶えに呻いた啓介は、腕をつかまれて強引に起こされた。檸檬や葉子が慌てて避ける中、さくらは自慢の巨乳で青年を片手で抱き留める。

「んぷっ、く、苦し……!」

「ほらほら、墨川先生のおっぱいみたいでしょ。このシスコンめっ、危険日の先生とエッチして、そんなに満足したの?」

にやにや笑いながら、勝ち気な少女メイドは空いた手でパンティをずらした。スペルマと愛液にまみれた剛直を握ると、ゆっくり腰を落としていく。

膣口に龟头が触れると、さくらは嬉しそうに腰を前後に振った。蜜でぬらつく秘唇が、射精直後の勃起を確かめるように撫でる。硬く充血したクリトリスで、ペニスの尿道口をくりくりとつつき回した。

「んー、ちよっと硬さが足りないかなあ」

「そりゃ、出したばっかりだからな」

今ひとつ元気の出ない顔をして啓介が言うと、お嬢様メイドはちよっとプライドを傷つ

けられたような顔をした。

「むう……あ、そうだ。啓介これ見て」

さくらがポケットから取り出したのは、体温計のような、リトマス試験紙のような、妙な器具だった。「判定」と書かれている丸い窓に、赤紫色のラインが出ている。

「なにこれ」

「バカ、知らないの？ ……妊娠検査薬よ。おしっこに浸けて、妊娠してるかどうか調べろの。もちろん私のね」

ちよつぷりはにかみながら、見習いメイドは言葉が続けた。

「……もうすぐパパかもね、啓介」

「えっ、それって……ちよつ、うわっ!？」

最後まで聞く余裕を与えずに、さくらはいきなり腰を沈めた。柔らかい媚肉が、ぬるりとペニスを呑み込む。

「んっ……あはあっ、あははっ！ 啓介のおちんちん、硬くなってる」

対面座位で交わりながら、小生意気なメイド見習いはクスクス笑った。戸惑う青年の首筋にキスしながら、さくらは濡れた囁きを吹き込む。

「最初にエッチした日が排卵日だったんだから、しょうがないわよ。ね、こんな年下のメイドを孕ませて興奮した？」

「う、うう……」

確かに危険日の処女子宮にたつぷりと射精した身としては、何も言い返すことができない。嫌な汗がどっと噴き出してきて、背筋を冷たく濡らす。

「ふふふ、大丈夫よ。もう私、啓介以外の御主人様なんかいららないもん。あなただけのメイドになってあげる♪」

「さくらちゃん、でもそれ……」

葉子がおか言いかけるが、それをお嬢様メイドが威嚇した。

「おだまりっ！ 次は葉子にやらせてあげるから、何も言わないのっ！」

「……はい」

小さく溜め息をついて、黙ってしまおう眼鏡っ娘メイド。

「な、なんだ？ どういうこと？」

「いいからいいから。子どもの名前でも考えながら、エッチしましょうね。パ・パ♪」

ぎゅつと青年の肩を抱き締めると、さくらはリズムカルに腰を振り始めた。初々しい肉褌が、勢いよく龟头粘膜を擦る。よほど逸物に飢えていたのか、きゅうきゅうと吸いつくように締めてくるのがたまらない。

（なんかどうも怪しいけど……ま、いいか）

それよりも、さくらがこれだけ素直に愛情を表現してくれるのが嬉しかった。喧嘩して

るかSMプレイをしているか、どっちかだけの関係だっただけに、素直に甘えてくる仕草が妙に可愛く思えてしまう。

それに何よりも、みずみずしく健康的な蜜壺の味わいは、最高だった。活発なさくら同様に、膣粘膜も激しくうねって亀頭を呑み込む。ざらついた肉壁が愛液を泡立てながら、肉の幹を擦り立てていた。

尻の辺りがむずむずするような衝動に駆られて、啓介は自然と腰を振り始める。あぐらをかけた姿勢でメイドの腰を抱き、ぐいぐいと激しく突き上げてやった。

「あっ、はあんっ、最高っ！ うあっ……ひゃあんっ！ ひああっ！」

喘ぎ声を我慢していたような十六夜と違って、さくらの嬌声は甲高く澄んでいる。これはこれで、なかなか耳に心地よい声だ。

啓介はこの少女がマゾっ娘であることを思い出し、言葉でもさくらを責める。小さな身体に不釣り合いなほど発達した乳房を、わしづかみにして揉みしだいた。

「こっ、このっ……俺がパパならっ……お前はママだろっ！ こんなエッチなおっぱいやがって、絞ってやる！ 母乳出してみろよっ！」

「あひいっ！ やっ、やだあっ！ ふあああっ！ もっと、もっと強くううっ！」

言葉でなぶられた瞬間、どっと熱い蜜が胎内から溢れ出してくる。やはり苛めて欲しかったらしい。間近に見る少女の顔は、とろけたような幸福感に包まれている。

「いいなあ、さくらちゃん……」

「桃園寺さん、気持ちよさそうですね……」

葉子と檸檬が、羨ましそうに青年とメイドの交合を見つめている。

すると十六夜の汗を舐め取っていた蜜柑が、ぼそりと呟いた。

「混ぜっちゃえば？」

一瞬、顔を見合わせる師弟。二人が無言でうなずくまでに、そう時間はかからなかった。ちびっこメイドと貧乳メイドは、いそいそとメイド服の胸元を開放し、スカートをめくり上げる。

「御主人様、私たちも混ぜてくださいっ！」

ほとんど同時に二人が叫び、半裸のメイド少女たちが抱きついてきた。青年の太ももに腰掛けると、甘えるようにしがみつく。

「こっ、こら動きにく……わっ、おい、ちよつと……おおうっ！」

絡みついてきた葉子と檸檬は、薄い胸を啓介の身体に擦り寄せる。つんと尖った未熟な蕾が、火照った身体を妖しくくすぐった。同時に幼い舌端が、左右から青年の裸身を舐める。

「御主人様あ……さくらちゃんの次は、私でもいいですか？」

「んむっ、んっ……ふっ、深森さん、ずるいですよっ！」

「わ、わかったから、少し落ち着いてくれ、二人とも」

太ももにヌルヌルとした感触を感じて、青年が慌てて少女たちをなだめる。啓介の脚に秘唇を擦りつけて、葉子と檸檬は自らを慰めていた。

（ああもうっ、俺のチンポは一本しかないんだよ！ いっぺんに三人とか無理だから！）
内心で悲鳴をあげつつも、美少女三人を独占する幸福感は否定できない。これだけ情熱的に愛されて、胸の奥がジーンと熱くなってくる。

「大変そうね、啓介さん」

蜜柑が面白がっている口調で、啓介の額をつんつんついた。姉の十六夜も、美少女メイド三人に抱きつかれている弟を見下ろす。

「ちょっと啓介には荷が重いかしら？ 手伝ってあげるわ」

十六夜と蜜柑は顔を見合わせてうなずくと、檸檬と葉子の背後に回り込んだ。

「小金井先生……いいえ檸檬ちゃん、元担任の私が可愛がってあげるわ」

「んじゃ私は葉子ちゃんを。……姉妹以外でレズは久しぶりね」

メイド教官は同僚のちびっこメイドを、大きな胸で包み込むように抱き締める。啓介との間でサンドイッチにしてしまうと、檸檬の秘裂に指を潜り込ませた。青年からは見えな
いが、ゴスロリメイドの小さな身体が跳ねる。

「ひゃっ、ああんっ、先生っ！ いけませんっ……ひあああっ！」

「檸檬ちゃん、ここが好きなのかしら？」

小さなメイド先生を弄びながら、黒衣のメイドはくすくす笑う。もう片方の手は、檸檬の唇に回した。十六夜の指には、ねっとり和白濁色の粘液がまとわりついていてる。

「ほら、あなたの大好きな啓介の精液よ。私の愛液が混ざっちゃってるけど、勘弁してね」

「ああ、御主人様の……んっ、んんうっ……！」

うっとりとはきながら、女教師の指を舐めしゃぶるちびっこメイド。あどけない瞳には淫蕩な光が宿り、うっすらと笑みすら浮かんでいる。

それを見ていた葉子が、思わず腰を浮かしかけた。

「あっ、先生、私にも……はううっ!？」

眼鏡っ娘メイドの言葉が、途中で遮られる。見れば蜜柑が、葉子の腰を抱え込んで愛撫していた。妖しく蠢く金髪メイドの指が、同性の少女をたちまち酔わせてしまう。

「御主人様への奉仕を忘れちゃだめよ。母校の後輩を、みっちり教育してあげるわ」

「あっ、ひゃあうっ! くはああつ! やっ、だめっ、死んじゃううっ!」

がくがくと肩を震わせて、壊れた人形のように脱力する優等生メイド。艶やかな黒髪が乱れ、汗まみれの素肌に貼りつく。

「たっ、たすけて……御主人様あつ! ひゃうっ! ひっ、あ、あああつ!」

青年の肩に頭を預けて、葉子は澄んだ悲鳴をあげる。眼鏡がずれるが、彼女にそれを直

す余裕はないらしい。

「お、おい蜜柑ちゃん、無茶はするなよ……」

啓介は眼鏡つ娘メイドの頭を撫でながら、少し不安そうな声を出した。何しろ、青年の太ももは葉子の愛液でびしょびしょになっている。まるでタライの湯をぶちまけたように、太もも全体が熱い淫水で濡れていた。

「優しいのね、啓介さん。でもこの子の瞳が、私の指を放してくれないの」

無表情に呟きながら、ますます愛撫を加速させていく蜜柑。サディストの血が騒ぐのか、瞳に情欲の炎を燃やしている。それがまた、ぞくりとするほど美しい。

「ほら啓介っ、私に集中……しなさいよっ！ んっ……はああっ！ うっ、んんっ！」

乱暴に腰を遣いながら、さくらが青年の頭を抱き締める。たぶたと揺れ動く胸の谷間に、啓介は顔を埋められた。少女の甘酸っぱい体臭が、青年の胸いっぱい満たされる。燃え立つように熱い肌からは、汗の匂いが濃密に立ち込めていた。

「あっ、ふああっ！ ひっ！ け、啓介の……すごいっ！」

力任せに啓介の頭を抱き締めながら、お嬢様メイドは歓喜の叫びをあげた。失禁したように愛液を垂れ流し、さくらは髪を振り乱す。お返しに青年が少女を抱き締めると、小生意気なメイド見習いは感極まったように喘いだ。

「もっと、もっと強く抱いて……！ めちゃくちゃにしていからあっ！」

「むしろ、めちゃくちやにされた方が気持ちいいんでしょう？」

蜜柑が意地悪な声で言うが、どうも凶星のようだ。激しく乱暴にすればするほど、膣壁のひくつきがせわしなくなってくる。少女の蜜壺が壊れそうなほどに、啓介はピストン運動を激しくした。ざらつく蜜褌を貫くたびに、痺れるような心地よさが亀頭を襲う。

（こりゃ長くはもたないな……）

二度目の射精がそう遠くないことを感じて、啓介は少し抽送のペースを落とした。

だがそれをさくらが許すはずがない。令嬢メイドは自ら腰を振って、青年の逸物を貪るように味わう。

「だめえっ、啓介、もっともっとおっ！ 掻き回してええっ！ ふああっ！」

「あーもーっ！ この生意気娘めっ！ これでもくらえっ！」

ねだってばかりの身勝手メイドに、啓介の怒りと肉欲が爆発した。あらん限りの力を込めて、腰を突き上げる。

「これで満足かつ！ このっ、このこのっ！」

「ひああああっ！ やっ、すごっ……きゃふううううっ！」

のけぞりながら、さくらが悦楽の悲鳴をほとばしらせる。身体から力が抜け、少女の腕がだらりと垂れ下がった。

青年はお嬢様メイドの腰を抱きながら、呆れるほどに発達した乳房をこねくり回した。

絞れば母乳が出てきそうな肉の実を、激しく揉みしだく。もちろん、腰を遣うのも忘れな
い。微妙に角度を変えながら、幹が陰核を擦るように深々と貫く。

「ひっ、きゃああっ！ ああんっ！ すっ、すてきいいっ！ ひあああんっ！」

がくがくと揺さぶられながら、さくらはとろけたような表情を見せた。締まりのない唇
からは、涎をだらだらと垂らしている。額に浮いた珠のような汗が、後から後から流れ落
ちていった。

だが、啓介の方も限界に近かった。若くのびやかな肢体は、何もかもが素晴らしかった。
触り心地といい、匂いといい、膣の締めり具合といい、全てが男を狂わせる甘美な味わい
だ。密集した褻がペニスの裏筋を擦り、吸盤のように吸いついて離さない。

ぬかるむ秘唇は、食欲に逸物をすすり、舐めしゃぶる。腰を引こうとすると、肉褻が吸
いついてくるのだ。尿道が真空状態になり、そのたびに頭が痺れるほどの快感が走る。

啓介に抱きついている二人のメイドたちも、青年の太ももに秘唇を擦りつけながら快楽
を貪る。十六夜の指に責められる檸檬も、蜜柑の指技に酔う葉子も、汗まみれになりなが
ら腰を振り続けていた。

（くそっ、さすがにもうダメだっ……！）

三人を同時に相手しては、さすがに射精したばかりでも耐えきれない。ぐんぐんと迫り
来る放出の予兆に、啓介は覚悟を決めて抽送を速める。

「さっ、さくらああっ！ 一緒に……一緒にイこうっ！」

「うっ、うんっ！」

ほとんど反射的に、素直にこっくりとうなずいたメイドお嬢様。普段の強気な態度は、どこかに吹き飛んでしまったようだ。

「檸檬ちゃんも……よ、葉子ちゃんもっ……！」

「はいっ、ごっ、ごしゅじんさまあっ！」

「ひあああっ！ は、はいっ！」

檸檬と葉子が、甘酸っぱい悲鳴をあげながらうなずく。今にも達してしまいそうなメイドたちに、啓介は唇を重ねた。代わる代わるに舌を絡め、唇を吸い、唾液をすする。甘い蜜のようなキスの味が、青年を一層興奮させる。

「すっ、すきいっ！ けいすけっ、だいすきいっ！」

さくらの告白に呼応するように、蜜壺が収縮する。射精間際のペニスを締め上げ、膣壁はうねりながら逸物を奥へ奥へと誘った。

「うっ、くおおおっ!？」

さくらの淫らかな媚肉に、啓介の怒張が悲鳴をあげた。括約筋の縛めを振りきるようにして、ペニスが爆発する。

「ぬおおっ、でっ、出るっ！ 出るぞっ！ がっ、くああっ、うあああああ——っ!!」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>